

Representations of a solvable Lie group  
on  $\bar{d}_b$  cohomology spaces

京大理 野村隆昭 (Takaaki NOMURA)

§1.  $\mathfrak{g}$  を有限次元の実リ-代数,  $j \in \mathfrak{g}$  上の実線型作用素で  $j^2 = -I_{\mathfrak{g}}$  をみたすもの, そして  $\omega \in \mathfrak{g}^*$  (i.e.  $\omega$  は  $\mathfrak{g}$  上の一次形式) とする. 次の (i) ~ (iii) がみたさいるとき, 3つ組  $(\mathfrak{g}, j, \omega)$  を *normal  $j$ -algebra* といい.

(i)  $\mathfrak{g}$  は完全可解

(ii)  $j \in \mathfrak{g}_{\mathbb{C}}$  上の複素線型作用素に拡張し,  $\mathfrak{g}^- \in \mathfrak{g}_{\mathbb{C}}$  における  $j$  の固有値  $-\sqrt{-1}$  に対応する固有空間とすると,  $\mathfrak{g}^-$  は  $\mathfrak{g}_{\mathbb{C}}$  の部分代数

$$(iii) \quad \begin{cases} \omega([jx, jy]) = \omega([x, y]) & \forall x, y \in \mathfrak{g} \\ \omega([x, jx]) > 0 & \forall x \in \mathfrak{g} \setminus \{0\} \end{cases}$$

さて,  $(\mathfrak{g}, j, \omega) \in \text{normal } j\text{-algebra}$  とし,  $G = \exp \mathfrak{g}$  を  $\mathfrak{g}$  をリ-代数に持つ連結かつ単連結なリ-群とする.  $\mathfrak{g}$  の基本的構造についてはよく知られている. 本稿では Rossi and Vergne [7, Theorem 4.3] に従って, 次の定理 1 にまとめよう. まず, 実ベクトル空間  $\mathfrak{g}$  は内積  $\langle x, y \rangle = \omega([x, jy])$

と持ち、 $\mathfrak{g}$ はこの内積を $\mathfrak{g}$ 上の直交変換になつてゐることに注意する。また、 $\mathfrak{g}$ を $j$ によつて複素ベクトル空間と見たもの $\varepsilon(\mathfrak{g}, j)$ を表すと、 $(\mathfrak{g}, j)$ はエルミート内積

$$(1) \quad (x, y) = \omega([x, jy]) - i\omega([x, y])$$

と持ち、 $\varepsilon$ として、 $\langle x, y \rangle = \operatorname{Re}(x, y)$  である。

### 定理1 (Pyatetskii-Shapiro [6]).

(i)  $\mathfrak{r}' = [\mathfrak{g}, \mathfrak{g}]$  とし、 $\sigma \in \mathfrak{g}$  における  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  にかんする  $\mathfrak{r}'$  の直交補空間とする。このとき、 $\sigma$  は  $\mathfrak{g}$  の可換部分代数  $\mathfrak{g} = \sigma + \mathfrak{r}'$  であり、 $\mathfrak{g}$  の随伴表現の制限で定義される  $\sigma$  の  $\mathfrak{r}'$  への表現は completely reducible である：

$$\mathfrak{r}'_{\alpha} = \{ x \in \mathfrak{g}; [H, x] = \alpha(H)x \quad \forall H \in \sigma \} \quad (\alpha \in \sigma^* \setminus \{0\})$$

とおくと  $\mathfrak{r}' = \sum^{\oplus} \mathfrak{r}'_{\alpha}$ 。そしてこの分解は  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  に関する直交分解である\*。

(ii)  $0 \neq j\mathfrak{r}'_{\alpha} \subset \sigma$  となる  $\alpha \in \sigma^* \setminus \{0\}$  の全体を  $\alpha_1, \dots, \alpha_l$  とすると、 $l = \dim \sigma$ ,  $\dim \mathfrak{r}'_{\alpha_k} = 1$  ( $1 \leq k \leq l$ ) であり、必要ならば番号を適当に付け変えると  $\mathfrak{r}'_{\alpha} \neq \{0\}$  となる  $\alpha \in \sigma^* \setminus \{0\}$  は次の形 (ただし、すべての possibilities が起こるとは限らない)。

$$\frac{1}{2}(\alpha_k + \alpha_m) \quad (1 \leq m < k \leq l), \quad \frac{1}{2}(\alpha_k - \alpha_m) \quad (1 \leq m < k \leq l)$$

$$\frac{1}{2}\alpha_k \quad (1 \leq k \leq l), \quad \alpha_k \quad (1 \leq k \leq l)$$

$l = \dim \sigma$  のことを  $\mathfrak{g}$  の階数と呼び  $\operatorname{rank} \mathfrak{g}$  を表す。

\*以後この  $\mathfrak{r}'$  は理れたい。

$$(iii) \quad \mathfrak{g}(0) = \mathfrak{a} + \sum_{k>m} \mathfrak{r}_{(\alpha_k - \alpha_m)/2}, \quad \mathfrak{g}(1/2) = \sum_{i=1}^l \mathfrak{r}_{\alpha_i/2},$$

$$\mathfrak{g}(1) = \sum_{k>m} \mathfrak{r}_{(\alpha_k + \alpha_m)/2}$$

とおくと,  $[\mathfrak{g}(k), \mathfrak{g}(m)] \subset \mathfrak{g}(k+m)$  が成り立つ. そして

$$j \mathfrak{r}_{(\alpha_k - \alpha_m)/2} = \mathfrak{r}_{(\alpha_k + \alpha_m)/2} \quad (k > m), \quad j \mathfrak{r}_{\alpha_m/2} = \mathfrak{r}_{\alpha_m/2} \quad (1 \leq m \leq l)$$

(iv)  $u_i \in \mathfrak{r}_{\alpha_i} \quad (1 \leq i \leq l)$  に  $[j u_i, u_i] = u_i$  と選ぶと  $\alpha_k(j u_i) = \delta_{ki}$  となる.  $\mathfrak{s} = \sum_{i=1}^l u_i$  とおくと,  $\mathfrak{g}(k)$  は  $\text{ad } \mathfrak{s}$  の  $k$ -固有空間.

以下  $\mathfrak{g}$  の部分空間上の Lebesgue 測度はすべて内積  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  に關して正規化されていゝものとする.  $G(0) = \exp \mathfrak{g}(0)$ ,  $G(1) = \exp \mathfrak{g}(1)$  とそれぞれ  $\mathfrak{g}(0)$ ,  $\mathfrak{g}(1)$  に対応する  $G$  の連結部分群とする. また,  $N = \exp(\mathfrak{g}(1/2) + \mathfrak{g}(1))$  は  $G$  の高々 2-step な連結バネ零部分群である. そして  $G$  は  $G = N \rtimes G(0)$  と半直積で表される. さて我々の問題を述べる前に次の誘導表現  $T$  の既約分解を考へてみよう:  $T = \text{Ind}_{G(0)}^G \mathbb{1}$  ( $\mathbb{1}$  は  $G(0)$  の trivial 1次元表現).  $G/G(0)$  と  $N$  とは微分同型であるから,  $T$  は  $L^2(N)$  上に実現できる ( $N$  は単連結バネ零リ一群故,  $N$  の Haar 測度は  $\pi = \text{Lie } N$  上の Lebesgue 測度):

$$(2) \quad T(g_0) f(n) = \delta(g_0)^{1/2} f(g_0^{-1} n g_0), \quad \delta(g_0) = (\det_{\pi} \text{Ad } g_0)^{-1}, \quad (g_0 \in G(0))$$

$$T(n_0) f(n) = f(n_0^{-1} n) \quad (n_0 \in N)$$

さて, 定理 1(iii) から  $G(0)$  は  $\mathfrak{g}(1)$  に  $G$  の随伴表現の制限を作用する. 従つて  $G(0)$  は  $\mathfrak{g}(1)^*$  にその反値表現を作用する. こ

の作用での開軌道については次の事実が知られている。

命題 1 (cf. Rossi et Vergne [8, Proposition 3.3.1]).

$\mathcal{X} = \{-1, 1\}^{\ell}$  ( $\ell = \text{rank } \mathfrak{g}$ ) とおく。  $u_i$  ( $1 \leq i \leq \ell$ ) を定理 1 (iv) の如くとし、  $u_i^* \in \mathfrak{g}(1)^*$  と  $u_i^*(u_k) = \delta_{ik}$  ( $1 \leq k \leq \ell$ )、  $u_i^*|_{\pi(u_k + d_m)/2} = 0$  ( $k > m$ ) を定義する。各  $\eta = (\eta_1, \dots, \eta_\ell) \in \mathcal{X}$  に対して、  $\lambda_\eta = \sum_{i=1}^{\ell} \eta_i u_i^* \in \mathfrak{g}(1)^*$  とおくと、  $\{\lambda_\eta\}_{\eta \in \mathcal{X}}$  は  $\mathfrak{g}(1)^*$  における  $G(0)$  の開軌道の完全代表系となし、  $\mathfrak{g}(1)^*$  の開集合をなす軌道の次元は  $\dim \mathfrak{g}(1)^*$  より真に小さい。以下  $O_\eta = G(0) \cdot \lambda_\eta$  とおく

$G$  の  $\mathfrak{g}^*$  への余随伴表現による作用での開軌道については次の通り。

命題 2.  $\mathfrak{g}^*$  における  $G$  の開余随伴軌道も  $\mathcal{X} = \{-1, 1\}^{\ell}$  をパラメータと見做し、  $\mathfrak{g}(1)^* \supset O_\eta \mapsto O_\eta \cong \mathfrak{g}(0)^* + \mathfrak{g}(1/2)^* + O_\eta \subset \mathfrak{g}^*$  なる一対一対応がある。

以下  $\rho: \mathfrak{g}^*/G \rightarrow \hat{G}$  を Kirillov-Bernat 対応とする。さて、  $\mathfrak{g}(1/2) = \{0\}$  とすると (この仮定は、normal  $\mathfrak{g}$ -algebra  $(\mathfrak{g}, \mathfrak{j}, \omega)$  に対応する Siegel 領域が tube 領域になることと同

値),  $T = \text{Ind}_{G(0)}^G \mathbb{1}$  は次の様にきれいに分解される:

$$(3) \quad T \cong \bigoplus_{\eta \in \mathbb{R}} \rho(\mathcal{O}_\eta)$$

証明は  $\mathcal{O}(1)$  と  $\mathcal{O}(1)^*$  の duality による (euclidean) Fourier 変換を用いると容易. 分解 (3) が互いに同値でない既約  $\mathbb{Z}$ -タリ表現の重複度 1 の和になつてゐることに注意. そして  $\rho(\mathcal{O}_\eta)$  ( $\eta \in \mathbb{R}$ ) 達は  $G$  の Plancherel 公式が書き下せることにも注意しておく.

一般に  $\mathcal{O}(1/2) \neq \{0\}$  とすると, 今度は  $T \cong \bigoplus_{\eta \in \mathbb{R}} \infty \rho(\mathcal{O}_\eta)$  となり, 各表現が無限の重複度を帯つて現れる. これは一つには  $G(0)$  が  $G$  に比べて小さすぎるといふことが原因である ( $T|_N$  は  $N$  の左正則表現であることに注意). 表現論的には  $T$  の部分表現  $T_0 \cong \bigoplus_{\eta \in \mathbb{R}} \rho(\mathcal{O}_\eta)$  となるものは如何様にもとり出せるが, 本稿では重複度を "削つ" て,  $\bigoplus_{\eta \in \mathbb{R}} \rho(\mathcal{O}_\eta)$  とする表現と, 幾何学的な対象と関連づけて produce するのが目的である. 以下, つねに  $\mathcal{O}(1/2) \neq \{0\}$  と仮定する. まず Rossi et Vergne [8, Théorème 3.5.11] による 1 つの結果を述べよう. そのために幾つかの準備が必要である.

簡単のため,  $V = \mathcal{O}(1/2)$  とおく.  $V$  は  $\mathfrak{g}$  で不変である (定理 1(iii)) から,  $\mathfrak{g}|_V$  は  $V$  を複素ベクトル空間とみなせて,  $(V, \mathfrak{g})$  を表す.  $V^\pm \in V_{\mathbb{C}}$  における  $\mathfrak{g}$  の固有値  $\pm\sqrt{-1}$  に対応する固有空間とする<sup>\*</sup>.  $N$  のリー代数の複素化  $\mathfrak{N}_{\mathbb{C}}$  の元と  $N$  上の

<sup>\*</sup>  $V^\pm$  は  $\mathfrak{N}_{\mathbb{C}}$  の可換部分代数になる.

左不変な微分作用素とみなして,  $L_{CR}^2(N)$  と

$$\{f \in C^\infty(N) : Xf = 0 \quad \forall X \in \mathfrak{V}^-\} \cap L^2(N)$$

の  $L^2(N)$  における閉包とすると,  $L_{CR}^2(N)$  は (2) の定義された  $G$  のユニタリ表現  $T$  で不変である. 一方

$$(4) \quad Q(x, y) = \frac{1}{4} ([jx, y] + i[x, y]) \quad (x, y \in \mathfrak{V})$$

とおくと,  $Q$  は  $(\mathfrak{V}, j) \times (\mathfrak{V}, j)$  から  $\mathfrak{U}(\mathfrak{I})_{\mathbb{C}} \wedge$  の hermitian sesquilinear map である.  $n = \dim_{\mathbb{C}}(\mathfrak{V}, j)$  とし,  $\mathfrak{U}(\mathfrak{I})$  上の一次形式の集合  $\Xi$ ,  $\Xi_p$  ( $1 \leq p \leq n$ ) を次で定義する.

$$(5) \quad \begin{aligned} \Xi &= \{ \lambda \in \mathfrak{U}(\mathfrak{I})^* : \lambda \circ Q \text{ は非退化} \} \\ \Xi_p &= \{ \lambda \in \Xi : \lambda \circ Q \text{ の負の固有値は } p \text{ 個, 正の固有値は } \\ &\quad n-p \text{ 個} \}. \end{aligned}$$

$(\mathfrak{U}, j, \omega)$  が normal  $j$ -algebra であることから,  $\omega \in \Xi_n$  従って  $\Xi_n \neq \emptyset$  である.  $\Xi_n$  は  $G(\mathfrak{I})$ -不変な開集合であり,  $\Xi_n$  に含まれる開  $G(\mathfrak{I})$ -軌道  $\Omega$  を全部とってそれらを  $O_{\eta(1)}, \dots, O_{\eta(k)}$  ( $\eta(m) \in \mathfrak{X}$ ,  $m=1, \dots, k$ ) とすると,  $\overline{\Xi_n} = \bigcup_{m=1}^k \overline{O_{\eta(m)}}$  (バーは閉包) である.  $O_{\eta(1)}, \dots, O_{\eta(k)}$  は命題 2.3 で得られる  $\mathfrak{U}^*$  の開余随伴軌道とする.

定理 2 (Rossi et Vergne).  $T|_{L_{CR}^2(N)} \cong \bigoplus_{m=1}^k \mathcal{P}(O_{\eta(m)})$

注意  $\mathfrak{f} = \mathfrak{U}(\mathfrak{I})_{\mathbb{C}} + \mathfrak{V}^-$  とおくと,  $\mathfrak{f}$  は  $\mathfrak{U}_{\mathbb{C}}$  の部分代数である

り,  $\omega \in \mathcal{O}^*$  に従属してゐる. 余随伴軌道  $G \cdot \omega$  は開集合 (実際  $\eta = (-1, \dots, -1) \in \mathcal{X}$  に対応する  $\mathcal{O}_\eta$  がある) であるから,  $f$  は  $\mathcal{O}_\mathbb{C} \times \mathcal{O}_\mathbb{C}$  上の交代双一次形式  $x, y \mapsto \omega([x, y])$  に関する Lagrangian (= maximal totally isotropic) subspace である. しかし,  $f + \bar{f} = \mathcal{O}(0)_\mathbb{C} + \mathcal{O}(1/2)_\mathbb{C}$  は  $\mathcal{O}_\mathbb{C}$  の部分代数ではない. 従つて,  $f$  は polarization ではなく, weak polarization ではない (cf. Ozeki-Wakimoto [5]. 本稿で使う用語 polarization は [5, Def. 2.1] では admissible  $\omega$ -polarization となつてゐる). この weak polarization  $f$  を用いて, Rossi et Vergne [8] では  $T|_{L_{CR}^2(N)}$  が定式化されてゐる.

従つて, 問題は定理 2 でもれてゐる表現を如何にして拾ひあげるかである.  $L_{CR}^2(N)$  は, いわゆる自乗可種分な CR 函数の空間であるから, 次に自乗可種分な  $\bar{\omega}$  のホモロジー空間を考へるのが自然であらう.

§2.  $M \in C^\infty$  多様体とする. Greenfield [2] に従つて CR 多様体を定義する. 複素化した接バンドル  $T(M)_\mathbb{C}$  の subbundle  $T^{1,0}$  についての (i), (ii) を満たすもの  $M$  上の CR 構造としよう.

- (i)  $T^{1,0} \cap T^{0,1} = \{0\}$  (zero section), したがって,  $T^{0,1} = \overline{T^{1,0}}$ .
- (ii)  $T^{1,0}$  は involutive, i.e.,  $\alpha, \beta$  が  $T^{1,0}$  の smooth sections

のとき, その bracket  $[\alpha, \beta]$  も  $T^{10}$  の section  
 として, 対  $(M, T^{10})$  を CR 多様体としよう. 以下,  $M$  上には  
 Riemann 構造があつて, CR 構造と compatible に  $T(M)_{\mathbb{C}} \wedge$   
 hermitian に拡張されたものであるものとする, i.e.,  $T^{10} \perp T^{01}$  か  
 つ conjugation  $-$  は  $T_x(M)_{\mathbb{C}}$  ( $\forall x \in M$ ) を isometry とする.  
 $E = (T^{10} \oplus T^{01})^{\perp} \subset T(M)_{\mathbb{C}}$  とおき,  $\Lambda^{10}$  (resp.  $\Lambda^{01}$ ) を  $T^{01}$   
 $\oplus E$  (resp.  $T^{10} \oplus E$ ) の  $T^*(M)_{\mathbb{C}}$  における annihilator とする.

$$\Lambda^{p,q} = \underbrace{\Lambda^{10} \wedge \cdots \wedge \Lambda^{10}}_p \wedge \underbrace{\Lambda^{01} \wedge \cdots \wedge \Lambda^{01}}_q \subset \Lambda^{p+q}(T^*(M)_{\mathbb{C}})$$

とおき,  $\pi_{p,q}$  を直交射影  $\Lambda^{p+q}(T^*(M)_{\mathbb{C}}) \rightarrow \Lambda^{p,q}$  とする.  $\Pi(\Lambda^{p,q})$   
 を  $\Lambda^{p,q}$  の  $C^0$  sections 全体を表すとき,  $\bar{\partial}_b: \Pi(\Lambda^{p,q}) \rightarrow \Pi(\Lambda^{p,q+1})$   
 を  $\bar{\partial}_b = \pi_{p,q+1} \circ d$  ( $d$  は外微分) と定義する.  $T^{10}$  が involutive  
 であるから  $\bar{\partial}_b \circ \bar{\partial}_b = 0$  となる.

さて我々の situation にもどらう.  $\Delta = \sum_{i=1}^k u_i \in \mathcal{O}(1)$  を定  
 理 1 (iv) の如くとし,  $\Omega = G(0) \cdot \Delta$  とおくと  $\Omega$  は  $\mathcal{O}(1)$  における  
 regular open convex cone である (Rossi and Vergne [7, Th. 4.  
 15]). として (4) と定義された  $Q$  は  $\Omega$ -positive になるから,  
 data  $\Omega, Q$  から第 2 種 Siegel 領域  $D = D(\Omega, Q)$  が構成  
 される:

$$D = \{ (w, v) \in \mathcal{O}(1)_{\mathbb{C}} \times (V, j); \operatorname{Im} w - Q(v, v) \in \Omega \}$$

さて,  $D$  の Šilov 境界を  $S(D)$  とすると, よく知られてゐる

様に

$$S(D) = \{(w, v) \in \mathcal{G}(1)_{\mathbb{C}} \times V; \operatorname{Im} w - Q(v, v) = 0\}$$

となる。  $S(D)$  は  $\mathcal{G}(1)_{\mathbb{C}} \times (V, j)$  の実部分多様体であるから、自然に  $CR$  構造が入る：  $\mathcal{T}(\mathcal{G}(1)_{\mathbb{C}} \times (V, j))$  を  $\mathcal{G}(1)_{\mathbb{C}} \times (V, j)$  上の正則接バンドルとすると、

$$T^0(S(D)) = T(S(D))_{\mathbb{C}} \cap \mathcal{T}(\mathcal{G}(1)_{\mathbb{C}} \times (V, j))|_{S(D)}$$

で  $S(D)$  に  $CR$  構造が入る。

一方、§1 で導入したベキ零リ一群  $N = \exp(\mathcal{G}(1/2) + \mathcal{G}(1))$  の各元を  $n(a, c)$  ( $a \in \mathcal{G}(1)$ ,  $c \in \mathcal{G}(1/2) = V$ ) で表すと、sesqui-linear map  $Q$  の定義と Campbell-Hausdorff の公式から、 $N$  の群演算は次の様に記述される：

$$(6) \quad n(a, c)n(a', c') = n(a + a' + 2A(c, c'), c + c')$$

$$T \in \mathbb{R}, \quad A(c, c') = \operatorname{Im} Q(c, c').$$

$N$  は  $\mathcal{G}(1)_{\mathbb{C}} \times (V, j)$  に

$$n(a, c) \cdot (w, v) = (w + a + 2iQ(v, c) + iQ(c, c), v + c)$$

で働く。そして明らかに

$$\gamma: N \ni n(a, c) \mapsto n(a, c) \cdot (0, 0) = (a + iQ(c, c), c) \in S(D)$$

は上への微分同型である。さて  $N$  にも  $T^0(N) = N \times V^+$  によって左不変な  $CR$  構造が入る。

補題1.  $\gamma: N \rightarrow S(D)$  は  $CR$  同型。

§1を導入した可上の内積  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  を  $\mathbb{C}$  上に制限したものと再び  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  を表す. この内積に関して,  $\pi = V \oplus \mathcal{O}(1)$  は直交分解である.  $\exists |V$  は  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  に関して  $V$  上の直交変換であるから,  $V^+$  と  $V^-$  は,  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  を拡張した  $V_{\mathbb{C}}$  のエルミート内積  $\langle \cdot, \cdot \rangle_{\mathbb{C}}$  を直交させている.  $V^+ \oplus \mathcal{O}(1)_{\mathbb{C}}$  の  $\pi_{\mathbb{C}}^*$  における annihilator は自然に  $(V^-)^*$  と同一視されるから,  $\Lambda^0 1$  は  $N \times (V^-)^*$  とみなされ,  $(V^-)^*$  と  $V^+$  には  $\mathbb{C}$ -linear duality があるから,  $\Gamma(\Lambda^0 1)$  は  $N$  上の  $V^+$  値  $C^\infty$  函数<sup>(の空間)</sup> と同一視できる. 従って  $\Gamma(\Lambda^0 0)$  は  $N$  上の  $\Lambda^0 V^+$  値  $C^\infty$  函数の空間とみることが出来る.  $V^+$  の基底  $(Z_k)_{k=1}^n$  と  $(\bar{Z}_k + \bar{Z}_k)_{k=1}^n$  が  $(V, j)$  を内積  $(\cdot, \cdot)$  (0) を定義されたものの  $(V, j)$  の制限) に関して正規直交基底となるものの全体を  $\mathcal{B}(V^+)$  を表す. さて,  $(Z_k)_{k=1}^n \in \mathcal{B}(V^+)$  をとって,  $\varphi, \psi \in \Gamma_c(\Lambda^0 0)$  (compact support of sections) を  $\varphi = \sum_J' \varphi_J \otimes Z_J$  ( $E \in \mathbb{Z}$   $Z_J = Z_{j_1} \wedge \dots \wedge Z_{j_g}$  for  $J = (j_1, \dots, j_g)$  と  $\sum_J'$  は  $1 \leq j_1 < \dots < j_g \leq n$  なる  $J = (j_1, \dots, j_g) \in \mathbb{Z}^g$  について) の和),  $\psi = \sum_J' \psi_J \otimes Z_J$  と表すとき,

$$(\varphi, \psi)_g = \frac{1}{2^g} \sum_J' \int_N \varphi_J(n) \overline{\psi_J(n)} dn$$

を  $\Gamma_c(\Lambda^0 0)$  に pre-Hilbert space structure を与える. 勿論この定義は  $(Z_k)_{k=1}^n \in \mathcal{B}(V^+)$  のとり方に依るが,  $\mathcal{J}_b \in \bar{\mathcal{O}}_b$  の formal adjoint i.e.  $(\bar{\mathcal{O}}_b \varphi, \psi)_{g+1} = (\varphi, \mathcal{J}_b \psi)_g$  とし,

$$\square_b = \mathcal{J}_b \bar{\partial}_b + \bar{\partial}_b \mathcal{J}_b \quad \text{とする.}$$

補題 2.  $\varphi \in \Gamma(\Lambda^q)$ ,  $\varphi = \sum_J \varphi_J \otimes Z_J$  のとき,

$$\square_b \varphi = -2 \sum_J \left( \sum_{m \notin J} Z_m \bar{Z}_m + \sum_{m \in J} \bar{Z}_m Z_m \right) \varphi_J \otimes Z_J$$

$$+ 2 \sum_J \sum_{k=1}^q (-1)^{k-1} \sum_{m \notin J} [Z_{j_k}, \bar{Z}_m] \varphi_J \otimes Z_m \wedge Z_{j_1} \wedge \cdots \wedge \hat{Z}_{j_k} \wedge \cdots \wedge Z_{j_q}$$

ただし,  $m \notin J = (j_1, \dots, j_q)$  (resp.  $m \in J$ ) とは,  $\forall k$  に対し,  
 $m \neq j_k$  (resp. ある  $k$  に対し  $m = j_k$ ) を示し,  $\hat{Z}_{j_k}$  は  $Z_{j_k}$   
 という項がないことを示すものとする.

さて, 定義域を  $\Gamma_b(\Lambda^q)$  とする  $\bar{\partial}_b, \mathcal{J}_b, \square_b$  をそれぞれ  $(\bar{\partial}_b)_0^q$ ,  
 $(\mathcal{J}_b)_0^q, (\square_b)_0^q$  とし,  $\bar{\partial}_b^q, \mathcal{J}_b^q, \square_b^q$  をそれぞれ作用素  $(\bar{\partial}_b)_0^q$ ,  
 $(\mathcal{J}_b)_0^q, (\square_b)_0^q$  の閉包とする. このとき, 簡単な議論で,

$$\text{Range } \bar{\partial}_b^{q-1} \subset \text{Dom } \bar{\partial}_b^q \cap \text{Ker } \bar{\partial}_b^q$$

i.e.,  $\bar{\partial}_b^q \circ \bar{\partial}_b^{q-1} = 0$  が示される.

$$H^q = \text{Ker } \bar{\partial}_b^q \ominus (\text{Range } \bar{\partial}_b^{q-1} \text{ の閉包})$$

とおき,  $H^q$  ( $q=0, 1, \dots, n$ ) を自乗可積  $\bar{\partial}_b$  コホモロジー空間と呼ぶ.

補題 3.  $H^q = \{ \varphi \in \text{Dom } \square_b^q : \square_b^q \varphi = 0 \}$  i.e.  $H^q = \text{Ker } \square_b^q$ .

§3. バネ零リ-群  $N$  上の Fourier 変換について述べよう.  $A = \text{Im } Q$  は  $V \times V$  から  $\mathfrak{g}(1)$  への交代双一次写像で,  $Q(x, y) = A(jx, y) + iA(x, y)$  である.  $\Xi$  を (5) で定義された集合とすると, 容易に

$\lambda \in \Xi \iff$  交代双一次形式  $\lambda \circ A$  が非退化.

がわかる. 従って,  $\lambda \in \Xi \hookrightarrow \mathfrak{r}^*$  の余随伴軌道は  $\lambda + \mathfrak{g}(1/2)^*$  となる.  $\rho_\lambda$  を余随伴軌道  $\lambda + \mathfrak{g}(1/2)^*$  に対応する  $N$  の既約ユニタリ表現 (同値類ではなく一つの表現) とする.  $\lambda(A(x, y)) = \langle A_\lambda x, y \rangle$  で  $V = \mathfrak{g}(1/2)$  上の歪対称作用素  $A_\lambda$  と定め,  $\text{Pf}(\lambda \circ A) = (\det A_\lambda)^{1/2}$  とおく.  $N$  は単連結バネ零リ-群であるから, 作用素  $\rho_\lambda(f) = \int_N f(n) \rho_\lambda(n)^{-1} dn$  ( $f \in C_c^\infty(N)$ ) は trace class になる.

Kirillov character formula.  $\lambda \in \Xi, f \in C_c^\infty(N)$  のとき,

$$\text{Tr}(\rho_\lambda(f)) = \left(\frac{\pi}{2}\right)^n \text{Pf}(\lambda \circ A)^{-1} \int_{\mathfrak{g}(1)} f(n(a, 0)) e^{-i\lambda(a)} da$$

$F \in \mathbb{R}, n = \dim_{\mathbb{C}}(V, j)$ .

この指標公式と,  $\Xi$  が  $\mathfrak{g}(1)^*$  で dense であることから, 次の反転公式を得る.

Inversion formula.  $\mathcal{O}(1)^*$  上の Lebesgue 測度を適当に正規化すると,  $f \in C_c^\infty(N)$  に対して

$$f(e) = \int_{\Xi} [T_\lambda f_\lambda(f)] Pf(\lambda \circ A) d\lambda$$

このより表現論の一般論を援用すると, 可測な既約  $\mathfrak{U} = \mathfrak{g}$  表現の族  $\{(T_\lambda, \mathfrak{H}_\lambda)\}_{\lambda \in \Xi}$  が存在して

$$(7) \quad L^2(N) \cong \int_{\Xi}^{\oplus} \mathfrak{H}_\lambda \otimes \mathfrak{H}_\lambda^+ Pf(\lambda \circ A) d\lambda \cong \int_{\Xi}^{\oplus} B_2(\mathfrak{H}_\lambda) Pf(\lambda \circ A) d\lambda$$

となることがわかる。ただし,  $\mathfrak{H}_\lambda^+$  は  $\mathfrak{H}_\lambda$  に共役同型な Hilbert 空間,  $B_2(\mathfrak{H}_\lambda)$  は Hilbert 空間  $\mathfrak{H}_\lambda$  上の Hilbert-Schmidt 作用素の全体がなす Hilbert 空間を表す。

ここで定義された  $H^0$  空間をもとにしよう。  $N$  の CR 構造は左不変であるから, 左移動で  $H^0$  上の  $N$  の  $\mathfrak{U} = \mathfrak{g}$  表現  $L_g$  が定義できる。

定理 3 (Rossi and Vergne [9, Th. 4.5]).

$$\sum_{g=0}^n L_g \cong \int_{\Xi}^{\oplus} T_\lambda Pf(\lambda \circ A) d\lambda.$$

§4. 我々はまず, 定理 3 と分解 (7) の関係を, 具体的に実現させた  $N$  の既約  $\mathfrak{U} = \mathfrak{g}$  表現を通して明らかにすることから始

めよう.  $(V, j)$  上のエルミート内積  $(\cdot, \cdot)$  に関する自己共役作用素  $H_\lambda \in \mathfrak{g}$   $\lambda(Q(x, y)) = (H_\lambda x, y)$  を定義し,  $(V, j)$  上の複素線型作用素  $j_\lambda \in \mathfrak{g}$   $j_\lambda = -i|H_\lambda|^{-1} H_\lambda$  ( $\lambda \in \mathfrak{g}$ ) を定義する. ただし,  $|H_\lambda| = (H_\lambda^2)^{1/2}$ . そうすると,  $V$  上の実線型作用素とみれば,  $j_\lambda$  は  $j$  と可換な複素構造であり,  $\lambda \in \mathfrak{g}_n$  のとき,  $j_\lambda = j$ ,  $\lambda \in \mathfrak{g}_0$  のとき  $j_\lambda = -j$  である. そして, 内積  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  に関して  $j_\lambda$  は直交変換になっている. 以下  $j_\lambda$  は  $V$  上の実線型作用素とし,  $V_{\mathbb{C}}$  上の複素線型作用素に自然に拡張しておく.  $V_{\mathbb{C}}(j_\lambda; -\sqrt{-1})$  を  $V_{\mathbb{C}}$  の  $j_\lambda$  の固有値  $-\sqrt{-1}$  に対応する固有空間を表すことにし

$$\mathfrak{g}_\lambda = \mathfrak{g}(1)_{\mathbb{C}} + V_{\mathbb{C}}(j_\lambda; -\sqrt{-1})$$

とおく. このとき,  $\mathfrak{g}_\lambda$  は  $\lambda \in \mathfrak{g} \hookrightarrow \mathbb{R}^*$  における totally complex 且 positive polarization となる. この  $\mathfrak{g}_\lambda$  を用いて  $N$  の holomorphically induced representation  $\pi_\lambda$  を構成しよう.  $X_\lambda \in \mathfrak{g}(1)$  のユニタリ指標  $\chi_\lambda(n(a, 0)) = e^{i\lambda(a)}$  なるものとすると,  $\pi_\lambda$  の表現空間  $\mathfrak{g}_\lambda$  は次の (i), (ii) を満たす  $f \in C^\infty(N)$  のなる空間の完備化 ((ii) の積分から定義されるノルムについて) である:

$$(i) \quad Yf = -i\lambda(Y)f \quad \forall Y \in \mathfrak{g}_\lambda \quad (\text{左不変微分作用素とみれば})$$

$$(ii) \quad \int_{N/G(1)} |f(n)|^2 d\bar{n} < +\infty$$

( $d\bar{n}$  は  $N/G(1)$  上の  $N$ -不変測度)

そして各表現作用素  $\pi_\lambda(\eta)$  は左移動を与えられる。通常の誘導表現  $\text{Ind}_{G(1)}^N \chi_\lambda$  の空間を  $L^2(N; \lambda)$  とすると,  $\mathcal{H}_\lambda$  は  $L^2(N; \lambda)$  の閉部分空間であることを注意しておく。一方,

$$Q_\lambda(z, w) = \lambda(A(\eta_\lambda z, w)) + i\lambda(A(z, w))$$

とおくと,  $Q_\lambda$  は  $(V, \eta_\lambda) \times (V, \eta_\lambda)$  上の負定値 hermitian sesqui-linear form である。一般に  $\lambda \circ Q \neq Q_\lambda$  であることを注意。  $(V, \eta_\lambda)$  上の正則函数  $F$  は

$$\|F\|_\lambda^2 = \int_V |F(v)|^2 \exp 2Q_\lambda(v, v) dv < +\infty$$

をみたすものの全体のなす Hilbert 空間を  $\mathcal{F}_\lambda(V)$  と表す。  $Q_\lambda$  は負定値であるから,  $\mathcal{F}_\lambda(V) \neq \{0\}$  である。そして次を与えられる対応  $\mathcal{H}_\lambda \cap C^\infty(N) \ni f \mapsto F \in \mathcal{F}_\lambda(V)$

$$F(v) = f(\eta(v, v)) \exp -Q_\lambda(v, v)$$

は, ( $d\eta$  を適当に正規化することにより) Hilbert 空間  $\mathcal{H}_\lambda$  と  $\mathcal{F}_\lambda(V)$  との同型に拡張される。そして,  $\pi_\lambda$  は次の  $\mathbb{Z} = \tau$  リ表現  $U_\lambda$  に変換される。

$$(8) \quad U_\lambda(\eta(a, b))F(v) = \exp(i\lambda(a) + Q_\lambda(b, b) - 2Q_\lambda(v, b)) \cdot F(v-b)$$

$(U_\lambda, \mathcal{F}_\lambda(V))$  は余随伴軌道  $\lambda + \mathcal{O}(\frac{1}{2})^* \subset \mathcal{H}^*$  に対応する  $N$  の既約  $\mathbb{Z} = \tau$  リ表現である。

かくして  $N$  の既約  $\mathbb{Z} = \tau$  リ表現の族  $(U_\lambda, \mathcal{F}_\lambda(V))_{\lambda \in \mathbb{E}}$  を得るが, この族を "重ね合わせ" することが出来る, i.e., Hilbert

空間の場合  $\Xi \ni \lambda \mapsto \mathcal{F}_\lambda(V)$  が直積分可能であることを簡単に述べておく. 今, ベクトルの場  $\Xi \ni \lambda \mapsto F_\lambda \in \mathcal{F}_\lambda(V)$  が可測 (可測性\* の Lebesgue 測度に関して) であるとは, 任意の  $v \in V$  に対して, 函数  $\lambda \mapsto F_\lambda(v)$  が可測なるときと定義する (各  $F_\lambda$  は  $\mathcal{F}_\lambda(V)$  の元, 従って一点  $v \in V$  での値  $F_\lambda(v)$  が意味を持つことに注意). この様に定義された可測なベクトルの場  $\Xi \ni \lambda \mapsto F_\lambda \in \mathcal{F}_\lambda(V)$  の全体を  $\Gamma$  とおくと,  $\Gamma$  は複素ベクトル空間であり, Dixmier [1, p.164] の Definition 1 (i) ~ (iii) をみたすことが示される ( $K_\lambda(z, w) = (\frac{2}{\pi})^n Pf(\lambda \circ A) \exp -2Q_\lambda(z, w)$  が  $\mathcal{F}_\lambda(V)$  の再生核であることをフルに使う). 従って

$$\begin{aligned} \text{定理 4. } L^2(N) &\cong \int_{\Xi}^{\oplus} \mathcal{F}_\lambda(V) \otimes \mathcal{F}_\lambda(V)^\dagger Pf(\lambda \circ A) d\lambda \\ &\cong \int_{\Xi}^{\oplus} B_2(\mathcal{F}_\lambda(V)) Pf(\lambda \circ A) d\lambda \end{aligned}$$

注意. ここに構成した既約ユニタリ表現の族  $(U_\lambda, \mathcal{F}_\lambda(V))_{\lambda \in \Xi}$  は, Ogden-Vagi [4] に構成されているものと, holomorphic induction の手続きを以て整理したものである.

さて,  $V_+^0(\lambda) = \wedge^0 V^+$  ( $\forall \lambda \in \Xi$ ) とおくと,  $\lambda \mapsto V_+^0(\lambda)$  は constant な Hilbert 空間の場がある. Dixmier [1, Prop. 11, p.174] より次の系を得る.

$$\begin{aligned} \text{系. } L^2(N) \otimes \wedge^2 V^+ &\cong \int_{\Xi}^{\oplus} \mathcal{F}_{\lambda}(V) \otimes \mathcal{F}_{\lambda}(V)^{\dagger} \otimes V_+^{\otimes 2}(\lambda) \text{Pf}(\lambda \circ A) d\lambda \\ &\cong \int_{\Xi}^{\oplus} B_2(\mathcal{F}_{\lambda}(V)) \otimes V_+^{\otimes 2}(\lambda) \text{Pf}(\lambda \circ A) d\lambda \end{aligned}$$

系の同型に従って,  $L^2(N) \otimes \wedge^2 V^+$  の閉部分空間である  $H^{\otimes 2}$  を特徴付けよう.  $V$  上の複素構造  $j_{\lambda}$  は  $j$  と可換であるから,  $j_{\lambda}$  は  $V^+ \ni$  不変にする.  $V^+(j_{\lambda}; \sqrt{-1})$  を  $V^+$  における  $j_{\lambda}$  の固有値  $\sqrt{-1}$  に対応する固有空間とし,  $p(\lambda) = \dim_{\mathbb{C}} V^+(j_{\lambda}; \sqrt{-1})$  とおく.  $\lambda \mapsto p(\lambda)$  は  $\Xi$  上 locally constant である. 実際  $\lambda \in \Xi_{\mathfrak{g}}$  のとき,  $p(\lambda) = \mathfrak{g}$  である.  $\mathfrak{z}(\lambda) = \wedge^{p(\lambda)} V^+(j_{\lambda}; \sqrt{-1})$  とおく. 明らかに  $\dim_{\mathbb{C}} \mathfrak{z}(\lambda) = 1$  であり  $\lambda \in \Xi_{\mathfrak{g}}$  のとき,  $\mathfrak{z}(\lambda) = \wedge^{\mathfrak{g}} V^+(j_{\lambda}; \sqrt{-1}) \subset V_+^{\otimes 2}(\lambda)$  となる. 従って  $(\lambda \mapsto j_{\lambda}$  は連続 (piecewise) である)  $\lambda \mapsto \mathfrak{z}(\lambda)$  は 1次元 Hilbert 空間の連続 (piecewise) な場である.

一方, 任意の  $\lambda \in \Xi$  に対して,  $V$  上の恒等的に 1 なる函数  $\mathbb{1}$  は  $\mathcal{F}_{\lambda}(V)$  に属する.  $B_2(\mathcal{F}_{\lambda}(V))$  に属する作用素  $T$  を値域  $\text{Range } T$  が 1次元部分空間  $\subset \mathbb{1}$  に含まれるものの全体  $A(\mathcal{F}_{\lambda}(V))$  とする. 明らかに  $A(\mathcal{F}_{\lambda}(V))$  は  $B_2(\mathcal{F}_{\lambda}(V))$  の閉部分空間で,  $A(\mathcal{F}_{\lambda}(V))$  自身 Hilbert 空間である.

定理 5.  $H^g \cong \int_{\Xi_g}^{\oplus} A(\mathcal{F}_\lambda(V)) \otimes \mathcal{F}(\lambda) Pf(\lambda \circ A) d\lambda$

$$\cong \int_{\Xi_g}^{\oplus} \mathcal{F}_\lambda(V)^\dagger Pf(\lambda \circ A) d\lambda$$

$$\cong \int_{\Xi_{n-g}}^{\oplus} \mathcal{F}_\lambda(V) Pf(\lambda \circ A) d\lambda$$

注意. (i) 写像  $A(\mathcal{F}_\lambda(V)) \ni T \mapsto T^* \left( \frac{1}{\|1\|_\lambda} \right) \in \mathcal{F}_\lambda(V)^\dagger$  が  $A(\mathcal{F}_\lambda(V))$  と  $\mathcal{F}_\lambda(V)^\dagger$  との Hilbert 空間としての同型を与える。

(ii)  $\mathcal{F}_\lambda(V)^\dagger \cong \mathcal{F}_{-\lambda}(V)$  は  $j_{-\lambda} = -j_\lambda$  から容易に導かれる。

系 (Rossi and Vergne [9]).  $H^g = \{0\} \iff \Xi_g = \emptyset$

§5. さて  $H^g$  を unitary  $G$ -module にすることを考えよう。まず"最初に次の事に注意する。  $G = N \rtimes G(0)$  と半直積に表されるから  $G/G(0)$  は reductive coset space である。よく知られている様に " $G/G(0)$  上に  $G$  不変な Riemann 計量が存在する  $\iff \mathfrak{n} = \text{Lie } N$  上に  $\text{Ad}_G G(0)$  不変な正定値内積が存在する" であるから、我々の場合  $G/G(0)$  上には  $G$  不変な Riemann 計量が存在しない。従って、通常の手続きをコホモロジー空間  $H^g$  上に  $G$  の  $\mathfrak{g}$ -タリ表現は定義できない。ところが、定理 5 により、 $H^g \cong \int_{\Xi_{n-g}}^{\oplus} \mathcal{F}_\lambda(V) Pf(\lambda \circ A) d\lambda$  であり、 $\Xi_{n-g}$  は  $G(0)$  space であるから、各 fiber  $\mathcal{F}_\lambda(V)$  を  $\mathcal{F}_{g,\lambda}(V)$  に写す  $\mathfrak{g}$ -タ

り変換が見つければ  $G = N \rtimes G(0)$  のユニタリ表現を定義することができる。しかし、 $j_\lambda$  と  $\text{Adv } g_0$  ( $g_0 \in G(0)$ ) の関係が簡単でないのび、求める変換  $j_\lambda(V) \rightarrow j_{g_0 \cdot \lambda}(V)$  を直接見出すのは難しい(結果としては見つかる)。そこで  $N$  の既約ユニタリ表現の別の実現を作ることから再出発する。

§6. 各  $\eta \in \mathcal{E} = \{-1, 1\}^2$  に対し、 $\lambda_\eta \in \mathfrak{g}(1)^*$  を命題1で定義されたものとする。  $j_{\lambda_\eta}$  と  $\lambda_\eta$  に対して §4 の冒頭の様にして作られる  $V$  上の複素構造とし、  $V$  上の作用素  $j_{g, \eta}$  と

$$j_{g, \eta} = (\text{Adv } g) \circ j_{\lambda_\eta} \circ (\text{Adv } g)^{-1} \quad (g \in G(0))$$

を定義する。  $\text{Adv } g$  と  $j$  は可換であるから、  $j_{g, \eta}$  は  $j$  と可換な  $V$  上の複素構造である。ただし、  $V$  上の内積  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  に関して、一般には、  $j_{g, \eta}$  は直交変換ではない。その代り、次の有用な関係式が成り立つ。

$$(9) \quad (\text{Adv } g_1) \circ j_{g_2, \eta} = j_{g_1 g_2, \eta} \circ (\text{Adv } g_1) \quad (\forall g_1, g_2 \in G(0), \eta \in \mathcal{E}).$$

以下 §4 と全く同じ方法で  $N$  の既約ユニタリ表現を構成する:

$$\sigma_{g, \eta} = \mathfrak{g}(1)_{\mathbb{C}} \oplus V_{\mathbb{C}}(j_{g, \eta}; -\sqrt{-1})$$

は  $g \cdot \lambda_\eta$  における totally complex positive polarization である。この  $\sigma_{g, \eta}$  を用いて構成される holomorphically induced representation を  $(\pi_{g, \eta}, \mathcal{H}_{g, \eta})$  とすると、  $\mathcal{H}_{g, \eta}$  は  $L^2(N; \lambda)$  ( $\lambda = g \cdot \lambda_\eta$ ) の閉部分空間である(このことは §7 で

$\pi_\lambda$  と  $\pi_{g,\eta}$  ( $\lambda = g \cdot \lambda_\eta$ ) との間の intertwining operator の構成に  
おいて用いる). 一方

$$Q_{g,\eta}(z, w) = \lambda(A(j_{g,\eta} z, w)) + i\lambda(A(z, w)) \quad (\lambda = g \cdot \lambda_\eta)$$

とおくと,  $Q_{g,\eta}$  は  $(V, j_{g,\eta}) \times (V, j_{g,\eta})$  上の負定値 hermitian  
sesqui-linear form である.  $(V, j_{g,\eta})$  上の holomorphic  
functions  $F$  は

$$\|F\|_{g,\eta}^2 = \int_V |F(v)|^2 \exp 2Q_{g,\eta}(v, v) dv < +\infty$$

をみたすものの全体のなす Hilbert 空間を  $\mathcal{F}_{g,\eta}(V)$  と表す.

$\mathcal{F}_{g,\eta}(V)$  上に  $N$  の既約  $\mathbb{Z}$ -タリ表現  $U_{g,\eta}$  が次の様に実現さ  
れる.

$$(10) \quad U_{g,\eta}(n(a, b))F(v) = \exp(i g \cdot \lambda_\eta(a) + Q_{g,\eta}(b, b) - 2Q_{g,\eta}(v, b)) \cdot F(v-b)$$

このとき,  $G(10)$  の左 Haar 測度と有限集合  $\mathcal{X} = \{-1, 1\}^{\mathbb{Z}}$  上の  
counting measure に関して, Hilbert 空間の場  $G(10) \times \mathcal{X}$   
 $\ni (g, \eta) \mapsto \mathcal{F}_{g,\eta}(V)$  が直積分可能と云うことも, §4 の  $\mathcal{F}_\lambda(V)$   
の場合と同様に示される.

$G(10)$  が完全可解で,  $\dim \mathcal{O}(10) = \dim \mathcal{O}(11)$  なることから,  
 $\mathcal{O}(11)^*$  の各開  $G(10)$  軌道  $\mathcal{O}_\eta$  ( $\eta \in \mathcal{X}$ ) と  $G(10)$  は微分同型で  
あることに注意しておく. model  $(U_{g,\eta}, \mathcal{F}_{g,\eta}(V))_{g \in G(10), \eta \in \mathcal{X}}$   
を用いた  $L^2(N)$  の分解は次の通りである.

定理 6.  $L^2(N) \cong \sum_{\eta \in \mathfrak{X}} \int_{G(0)}^{\oplus} B_2(\mathcal{F}_{g,\eta}(V)) \delta(g) dg$   
 ただし,  $\delta(g) = (\det_n \text{Ad} g)^{-1}$  ( $g \in G(0)$ ) を  $dg$  は  $G(0)$  の左 Haar 測度.

注意.  $\mathcal{F}_{g,\eta}$  が一般には  $V$  上の内積  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  に関して直交変換ではなくなる故,  $\text{model}(U_{g,\eta}, \mathcal{F}_{g,\eta}(V))_{g \in G(0), \eta \in \mathfrak{X}}$  を用いてコホモロジー空間  $H^0$  を直接解析することは困難である.

各  $g_0 \in G(0)$  と  $V$  上の函数  $F$  に対して

$$R(g_0)F(v) = (\det_v \text{Ad} g_0)^{-1/2} F((\text{Ad} g_0)^{-1}v)$$

とおく. 関係式(9)を用いて次の補題を示される.

補題 4. (i) 任意の  $g, g_0 \in G(0)$  と  $\eta \in \mathfrak{X}$  に対して  $R(g_0)$  は  $\mathcal{F}_{g,\eta}(V)$  から  $\mathcal{F}_{g_0g,\eta}(V)$  の上への  $\mathcal{U}$ -等変写像である.

$$(ii) R(g_0)U_{g,\eta}(n(g_0^{-1} \cdot a, g_0^{-1} \cdot b)) = U_{g_0g,\eta}(n(a, b))R(g_0)$$

§7. この節ではつねに  $\lambda = g \cdot \lambda_\eta$  ( $g \in G(0)$ ,  $\eta \in \mathfrak{X}$ ) とおく.  $\mathcal{U}$ -等変同値な  $N$  の  $\mathcal{U}$ -等変既約  $\mathcal{U}$ -等変表現  $(U_\lambda, \mathcal{F}_\lambda(V))$  と  $(U_{g,\eta}, \mathcal{F}_{g,\eta}(V))$  との間 *intertwining operator* を構成しよう. これは丁度 *positive polarization* のとりかえ  $\sigma_\lambda \rightarrow \sigma_{g,\eta}$  に対応する *intertwining operator* である (Mazur [3] 参照).

我々の場合,  $\mathfrak{g}_\lambda$  も  $\mathfrak{g}_{g,\eta}$  も共に *totally complex* なので議論は単純明快である. まず  $\mathfrak{g}_\lambda$  及び  $\mathfrak{g}_{g,\eta}$  が通常の誘導表現  $\text{Ind}_{G(\mathbb{C})}^G X_\lambda$  の空間  $L^2(N; \lambda)$  の閉部分空間であったこととを思い起こそう. このとき,

$$\mathfrak{g}_\lambda \xrightarrow{\text{injection}} L^2(N; \lambda) \xrightarrow{\text{直交射影}} \mathfrak{g}_{g,\eta}$$

を得られる作用素  $\mathfrak{g}_\lambda \rightarrow \mathfrak{g}_{g,\eta}$  が unitary intertwining operator と与えることは明らかである. これを  $\mathcal{F}_\lambda(V)$  から  $\mathcal{F}_{g,\eta}(V)$  への作用素として表すと次の様になる:

$$(II) \quad I_{g,\eta} F(v_0) = \int_V F(v) \exp[Q_\lambda(v, v) + Q_{g,\eta}(v, v) - 2Q_{g,\eta}(v_0, v)] dv$$

とおくと, 正の定数  $C_{g,\eta}$  が存在して,  $C_{g,\eta} I_{g,\eta}$  は  $\mathcal{F}_\lambda(V)$  から  $\mathcal{F}_{g,\eta}(V)$  <sup>(の上)</sup> への  $\mathbb{C}$ -線形な写像  $U_{g,\eta}(n) = I_{g,\eta} U_\lambda(n) (I_{g,\eta})^{-1}$  ( $\forall n \in N$ ) が成り立つ. 勿論この intertwining relation を直接確かめることも容易である ( $\text{Im } Q_\lambda = \text{Im } Q_{g,\eta}$  に注意).

(II) の右辺が  $\forall F \in \mathcal{F}_\lambda(V)$  に対して絶対収束していることも注意しておく. なお, この積分変換は,  $N$  が Heisenberg 群のとき ( $\text{rank } \mathfrak{g} = 1$  のときがそうである) すでに Satake [10] に現れたものである.

注意.  $\lambda \in \mathbb{C}^n$  のとき,  $\mathfrak{g}_\lambda = \mathfrak{g}_{g,\eta} = \mathfrak{g}$  であるから, 2つの model  $(U_\lambda, \mathcal{F}_\lambda(V))$  と  $(U_{g,\eta}, \mathcal{F}_{g,\eta}(V))$  は同一である. このときは, (II)

は、函数  $\exp -2Q_\lambda(z, w)$  の正の定数倍が再生核ということから、確かに恒等作用素の正の定数倍になっている。

補題 5.  $\psi_{g, \eta}(v) = \exp \frac{1}{2} (Q_\lambda(v, v) - Q_{g, \eta}(v, v) - i \operatorname{Re} Q_{g, \eta}(v, \lambda v))$  とおくと、 $\psi_{g, \eta} \in \mathcal{F}_{g, \eta}(V)$  であって、 $I_{g, \eta} \mathbb{1} \in \mathbb{C} \psi_{g, \eta}$ 。

§8.  $B_2(\mathcal{F}_{g, \eta}(V))$  に属する作用素  $T$  の値域  $\operatorname{Range} T$  が一次元部分空間  $\mathbb{C} \psi_{g, \eta}$  に含まれるものの全体を  $\mathcal{A}(\mathcal{F}_{g, \eta}(V))$  で表すと  $\mathcal{A}(\mathcal{F}_{g, \eta}(V))$  は Hilbert 空間  $B_2(\mathcal{F}_{g, \eta}(V))$  の閉部分空間、従って  $\mathcal{A}(\mathcal{F}_{g, \eta}(V))$  自身 Hilbert 空間である。よって、

$$\int_{\mathbb{R}}^{\oplus} B_2(\mathcal{F}_\lambda(V)) P_f(\lambda \circ A) d\lambda \ni F \mapsto \tilde{F} \in \sum_{\eta \in \mathcal{X}} \int_{G(0)}^{\oplus} B_2(\mathcal{F}_{g, \eta}(V)) \delta(g) dg$$

$$\tilde{F}_{g, \eta} = I_{g, \eta} F_{g, \lambda_\eta} (I_{g, \eta})^{-1}$$

は上への等長写像であり、次の Hilbert 空間としての同型を引き起こす。

$$\int_{0, \eta}^{\oplus} \mathcal{A}(\mathcal{F}_\lambda(V)) P_f(\lambda \circ A) d\lambda \cong \int_{G(0)}^{\oplus} \mathcal{A}(\mathcal{F}_{g, \eta}(V)) \delta(g) dg \quad (\forall \eta \in \mathcal{X})$$

$\mathcal{A}(\mathcal{F}_{g, \eta}(V)) \cong \mathcal{F}_{g, \eta}(V)^\dagger \cong \mathcal{F}_{g, -\eta}(V)$  であるから、定理 5, 6 と上の議論から次の定理を得る。

定理 7.  $H^0 \cong \int_{G(0)}^{\oplus} \mathcal{F}_{g,-\eta}(V) \delta(g) dg$ ,  $\mathbb{F}$  上  $\Sigma$  は  $O_\eta \subset \mathbb{E}_g$  となる  $\eta \in \mathfrak{g}$  すべてに対する和.

定理 7 の右辺は補題 4 (i) によって容易に unitary  $G$ -module とすることが出来るから,  $H^0$  に  $G$  のユニタリ表現  $\sigma_g$  が定義できることになる. ここでは  $\int_{G(0)}^{\oplus} \mathcal{A}(\mathcal{F}_{g,\eta}(V)) \delta(g) dg$  のユニタリ表現  $\pi_\eta$  を書き下しておく.  $e_{g,\eta} = \psi_{g,\eta} / \|\psi_{g,\eta}\|_{g,\eta}$  とし, 各  $x, y \in G(0)$  と  $\eta \in \mathfrak{g}$  に対して, 部分的等長写像  $P_{y,x}^\eta: \mathcal{F}_{x,\eta}(V) \rightarrow \mathcal{F}_{y,\eta}(V)$  を次のように定義する:

$$P_{y,x}^\eta = (\cdot, e_{x,\eta}) e_{y,\eta}$$

このとき, 容易に  $P_{z,y}^\eta P_{y,x}^\eta = P_{z,x}^\eta$  が成り立つことがわかる.

よして  $\pi_\eta$  の表現作用素は

$$(12) \quad \pi_\eta(g) F(x) = \delta(g)^{-1/2} P_{x, g^{-1}x}^\eta F(g^{-1}x) \mathcal{R}(g^{-1}) \quad (g \in G(0))$$

$$\pi_\eta(n) F(x) = F(x) U_{x,\eta}(n)^{-1} \quad (n \in N)$$

$$(F \in \int_{G(0)}^{\oplus} \mathcal{A}(\mathcal{F}_{g,\eta}(V)) \delta(g) dg)$$

補題 6.  $\rho: \mathfrak{g}^*/G \rightarrow \hat{G}$  と Kirillov - Bernat 対応とすると,  $\pi_\eta \cong \rho(\mathcal{O}_-\eta)$

定理 8.  $\sigma_g \cong \int \rho(\mathcal{O}_\eta)$ ,  $\mathbb{F}$  上  $\Sigma$  は  $O_\eta \subset \mathbb{E}_{n-g}$  となる  $\eta \in \mathfrak{g}$  すべてについての和で,  $\mathcal{O}_\eta = \mathfrak{g}(0)^* + \mathfrak{g}(\frac{1}{2})^* + O_\eta$  である.

注意. 定理 8 で  $q=0$  のときが定理 2 である.  $0_\eta \subset \mathfrak{E}_n$  となる様な  $\eta \in \mathfrak{E}$  に対しては,  $j_\lambda = j_{q,\eta} = j$  であるから,  $\psi_{q,\eta} = 1$  であることに注意. 従ってその様な  $\eta \in \mathfrak{E}$  に対しては, (12) の表示  $\pi_\eta(q)$  ( $q \in G(0)$ ) において,  $P_{x,q+x}^\eta$  の部分を  $\mathfrak{R}(q)$  としてもよく, また恒等作用素におきかえてもよい. しかし, 一般の  $\eta \in \mathfrak{E}$  に対しては,  $\mathfrak{R}(q_0) \psi_{q,\eta} \in \mathbb{C} \psi_{q_0,\eta}$  であるからそういう訳にはいかない.

かくして,  $\sum_{g=0}^n \sigma_g \cong \sum_{\eta \in \mathfrak{E}} \rho(\sigma_\eta)$  とはり,  $G$  の Plancherel 公式に現れる  $G$  の既約ユニタリ表現が丁度一回ずつ全部並ぶ表現を部分群  $N$  の CR 構造と関連付けて得ることができた.

なお <sup>(具体的な)</sup>  $L^2$ -対応の形での  $G$  の Plancherel 公式については稿を改めて報告する予定である.

## References

- [1] J. Dixmier, Von Neumann algebras, North-Holland, Amsterdam, 1981.
- [2] S.J. Greenfield, Cauchy-Riemann equations in several complex variables, Ann. Scuola Norm. Pisa, 22 (1968), 275-314.
- [3] B. Magneron, Spineurs symplectiques purs et indice de Maslov de plans lagrangiens positifs, J. Funct. Anal., 59 (1984), 90-122.
- [4] R.D. Ogden and S. Vagi, Harmonic analysis of a nilpotent group and function theory on Siegel domains of type II, Adv. Math., 33 (1979), 31-92.

- [5] H.Ozeki and M.Wakimoto, On polarizations of certain homogeneous spaces, Hiroshima Math. J., 2 (1972), 445-482.
- [6] I.I.Pyatetskii-Shapiro, Automorphic functions and the geometry of classical domains, Gordon and Breach, New York, 1969.
- [7] H.Rossi and M.Vergne, Representations of certain solvable Lie groups on Hilbert spaces of holomorphic functions and the applications to the holomorphic discrete series of a semisimple Lie group, J. Funct. Anal., 13 (1973), 324-389.
- [8] \_\_\_\_\_, Equations de Cauchy-Riemann tangentielles associées à un domaine de Siegel, Ann. Sci. Ec. Norm. Sup., 9 (1976), 31-80.
- [9] \_\_\_\_\_, Group representations on Hilbert spaces defined in terms of  $\bar{\partial}_b$ -cohomology on the Silov boundary of a Siegel domain, Pacific J. Math., 65 (1976), 193-207.
- [10] I.Satake, Factors of automorphy and Fock representations, Adv. Math., 7 (1971), 83-110.